

ごあいさつ

東光高岳技報の創刊に寄せて



代表取締役社長
高津 浩明

高岳製作所グループと東光電気グループがひとつになって初めての技報を発刊することとなりました。双方の技術の粋、とりわけ独自性のある技術論文や製品開発の話題をしっかりとこの小冊子に織り込んでいくつもりであります。みなさま方の叱咤激励を頂戴し、お役に立てる技報に育てて参りますのでご愛顧のほどお願い申し上げます。

さて、技術開発は極めて高い専門性を競いますので、その専門分野で基礎から始めて試行錯誤を重ね熟達する必要があります。日本古来の芸事では「守・破・離」の概念があります。何事もひとつの形から入りそれを繰り返すことでコツを掴み（守）、さらに習練すると独自の工夫ができることに気付き（破）、そしてついには個性的なモノづくりでひとつの一派を形成できるほどになる（離）。ひところ「セレンディピティ」（serendipity= 思わぬものを偶然に発見する能力）が話題になりましたが、限らない習練と失敗の中からも何かを掴もうとする意気込みがあってこそ新たな発見に出会うということなのでしょう。他人が生み出した設計理論を常識として鵜呑みにすると、背後に潜んでいる肝心のノウハウがわからず思わぬ落とし穴にはまってしまう危険があります。他人の技術を模倣することは効率的ですが、それに頼り切ってしまうはいけません。模倣を超えて自分なりの創造にたどり着いてこそ、その技術は身につき、お客さまに喜ばれる技術開発につながります。幸い、東光高岳は100年にならんとする社歴において、脈々と伝えられてきた愚直なモノづくり道があります。

もうひとつ、「知の揺らぎ」が必要であります。同じ仲間同士での議論ばかりではその分野の常識の陥穽にはまる恐れがあります。知の劣化です。それを避けるには他分野の異質の知を入れ込んで、揺らぎを起こすことが肝要です。学際的であれということが昔はよく言われました。多様な発想の意見が飛び交う「場」を設ければ、きっと将来の新しいコア技術が芽生えるはずです。高岳製作所と東光電気はお互い隣り合った分野の技術開発を手がけてきましたが、培ってきた暗黙知は異なります。この違いを上手に独創的な技術開発につなげていくつもりです。

科学と技術ではアプローチの仕方に違いはあるでしょうが、「守・破・離」と「知の揺らぎ」は共通項ではないでしょうか。

新生東光高岳の技術開発もこの視点を忘れずに邁進して参りますのでご支援を重ねてお願い申し上げます。